

数がかかることを知った。特に測定を通してCEA値が試薬のpH濃度に鋭敏に反応する点などはこのキットの一般普及を考える時大きな障害となろう。しかし血中CEA値を知ることは、それが癌の種類や部位に特異的なものでないにしても、その診断や治療及びその後の症状の経過観察に有用である。

我々は今後、さらに多くの経験を重ね、得られたCEA値を臨床面に反映させると同時に、CEA値測定法の簡素化を検討してゆくつもりである。

座長のまとめ(1~4)

吉井 弘文
(熊本大・放)

演題 1,2 のCKT₃R, CKT₄Rの使用経験では、従来より使用されているKitに比して、操作が簡略化され、特にT₄では、エタノール抽出を不要とする等、有利な条件をそろえている。しかし、T₄のデータがT₃に比して、均一性が低い点は、さらに改善の余地を残すものとする。

演題 3. Testosterone の測定法の検討は、まだ本邦における報告例も比較的少ないようであるが、今後の臨床的応用の範囲も広がるものと思われる。ただ、標識RIが³Hである点、測定に不便であるような感じがする。

演題 4. CEA の検討では、透析を必要とする点で使用がいくぶん制限されるようであるが、その他、2抗体等種々の検出法もあるので、将来、簡略化されるものと思われる。いずれにしても、 α -fetoproteinに次ぎ腫瘍特異抗体として注目されるものであり、非常に興味ある報告であった。今後の発展が期待される。

RI検査の主流は、Scintigramに代って件数の上ではRIAが占めているが、本会ではまだ演題も少なく、いくぶん淋しい感じもするが将来を期して会員各位の活躍を希望する。

5. シンチカメラ附属全身テーブルの使用経験について

○城 邦男 土器 訓弘
宮内 貞一
(福岡大・放)

使用装置は、PHO/GAMMA HP型シンチカメラ、全身カメラテーブルSS-10126A型で、いずれもNuclear Chicago社製であった。High resolution Collimatorと高感度フィルムを併用し、この結果、放射性同位元素の投与量を増加させずに、分解能もさほど悪くなく、検査時間の短縮ができた。均一性は、臨床的データからわかるように問題とならなかった。

高感度フィルムの利点は、良好なシンチフォトグラムを得る1つの因子として、分解能、スキャンスピードに作用することである。

6. ガンマカメラ imaging 条件に関する検討

○松本 政典 広田 嘉久
藤村 憲治 福井康太郎
(熊本大・放)

ガンマカメラによる臓器シンチグラフィにおいては、ガンマカメラの基本的特性のほか、CRTの輝点のintensityおよび計数値がimageの質に対し大きな影響をおよぼす。我々は、静的imageを得る場合、一般に、preset count方式で行っているが、例えば^{99m}Tcによる甲状腺のimagingを行なった場合、intensityおよびpreset countsを固定して行くと、得られる像は必ずしも全例とも同質の像とはならず、症例によって適正露光であったり、過度であったり、不足であったりする。この理由としては、各症例によって甲状腺の^{99m}Tc摂取量、body background、および甲状腺の大きさ等が異なることがあげられる。そのため実際のimagingにおいては、メモリースコープで見て、各症例に応じたintensityおよびtotal countsを経験的に設定して、行なっている。しかし、この場合でも、常に良質の像が得られるわけではなく、